◎「ハンディ背負った人が生きていく場を」
―北洋建設社長、小澤輝真さん「通年雇用奨励金が経営をサポート」

「継続して給料が支給されることで、やる気が出てくるし、技術もそれに伴って身に付く。冬場に仕事を確保することは大変だが、通年雇用とすることで技術も向上する。奨励金があることで経営的に大変助かっている」

札幌市東区に本社を置く北洋建設社長。とび・土工、解体業などの専門工事業者として1973年に創立し、ことし４月に３代目社長に就任した。

同社は、元受刑者を雇い入れる協力雇用主会に所属し、これまでに多数の元受刑者を技能者として雇用。家庭の事情などで中学までの学歴しかない人や障がい者も積極的に雇い入れ、現場の貴重な戦力として育て上げる企業としてその歴史を刻んできた。

社員を温かく見守る小澤社長

今年で創立42年を迎えるが、その歩みは決して順風満帆ではなかった。しかし、そうした苦境の中でも一貫していたのは、ハンディキャップを背負った人たちを決して見捨てず、家族として温かく見守ってきたことだ。

その原点には、創業者の父、先代の母が実践してきた「ハンディを背負った人が生きていくための場所を作ること」にある。小澤社長自身、３年前に脊髄小脳変性症という神経疾患を発症。現在は投薬によりやや持ち直したものの、歩行や会話に不自由する状態だ。「大変だけど、皆が助けてくれる。それに、痛みを経験してこそ見えてくるものもある」と、難病さえも前向きにとらえる。

従業員は15歳から70歳までと幅広い。2013年は、19人を対象として通年雇用奨励金を受け、現在約50人の職員をすべて通年雇用としている。新入社員は資格取得のための勉強や、現場で必要な体力を養うために、厳しい研修を実施。養成途中の若者がやめてしまうこともある。しかし「１年目は雑用ばかり。つまらないかもしれないが、何年か辛抱すれば、技術も身に付き仕事のおもしろさも分かる。技術に妥協はない。厳しいだろうけど、残った人は優れた職人になる」と、信念は揺るがない。

受注環境は依然として厳しいが、多くの従業員の通年雇用を維持していくためには継続的な受注が不可欠だ。「通年で働くことにより、生活が安定し、仕事にも集中できる。技術も磨かれる。しっかりとした仕事をすることで顧客との信頼関係が確かなものになる。その意味で通年雇用奨励金制度は、われわれのような技術が看板の企業の経営をサポートしてくれる欠かせないものだ」と、通年雇用の重要性を強調する。

同社で14年目となる鈴木穂営業部次長も「この会社は、飲み会一つとっても家庭的な雰囲気が濃い。一年を通して働くことにより、社員の連帯感も強まり、仕事の精度も確かなものとなるのでは」と話している。

 Copyright©2012.All Right Reserved.